

回想の楽園を求めて

——メルヴィルの『オムー』覚書——

中 村 紘 一

メルヴィルの『オムー』(Omoa, A Narrative of Adventures in the South Seas, 1847)の序文^{インレット}には、この作品を解釈するうえで、さまざまな興味ある言及がなされている。その中の一つに、「この物語は〔前作の〕『タイピー』が終ったところでもちろん始まっているが、『タイピー』とはそれ以上のつながりはない。したがって、『タイピー』を読んだことのない読者の理解に必要なことがらは総て短い序章の中に述べられている」という文章がある。これは両作品にはつながりがないような口振りである。しかし、両作品の語り手＝主人公は、明らかに同一人物である。もっとも、『タイピー』では彼はタイピー部落の住民からトンモという名で呼ばれていたのに対し、その部落を脱出してしまったところから始まる『オムー』では、当然と言えその名を継承することはない。『オムー』中のタヒチ島やイミオ島で、彼がどういう呼び名をされていたかは不明である。ただ、イミオ島の白人が経営する農園で働くことになった時には、ポールという仮名を、そして同道の相棒ドクター・ロング・ゴーストはピーターという仮名を使うことがあるにはあった。

序文は、次に作品の標題「オムー」の意味についても述べていて、それによれば、オムーとは「マルケサス諸

島の方言を借用したもので、その言葉は他に用法もあるが、放浪者——島から島へと渡り歩くさすらい人を意味する」という。この作品では、語り手||主人公自身がまさしくそのオム―であって、「放浪の水夫として、著者はタヒチ島とイミオ島のさまざまな所で、しかも原住民の社会的条件を観察するのに好都合な状況下で約三カ月を過すことになった」と、語り手は同じ序文で述べるのである。

前作の『タイピー』も語り手||主人公の四カ月（実際には、メルヴィルの場合はたったの四週間）にわたるマルケサス諸島ヌクヒヴァ島タイピー部落での体験を綴ったものである。そこで、『オム―』はその続篇であるとするなら、両者はひとまとめに読むべきもの、極言すれば、両者はほとんど同工異曲のものであるという説がよく唱えられる。この説には確かに首肯できるものがある。なぜなら、『オム―』の次に書かれた『マーディ』の序文が今度は示唆しているように、両者はあくまでも語り手||主人公、つまりは著者の体験したこと（それは南太平洋の島々におけるかなり特殊な体験であるが）、その事実を基盤（題材）にして書かれたものであり、そこに記述されていることからは決してありもしない作り物、フィクション絵空ごと（これを『マーディ』の序文では「ロマンス」と呼んでいる）でないからだ。

したがって、もしこういう観点に立つならば両者の間には確かに何ら異同はないと言えよう。ところが、そうであるはずのところの両作品を実際に読み較べてみると、同じような事実に基づいているとは言え、その事実に対する語り手||主人公の扱い方や態度にはやはり微妙な相違があるもので、その相違は右のような幾ら大きな観点に立つても、いや大きな観点に立てば立つほど無視できることのできないものに思われてくるのである。

その相違点とは、『オム』の標題が先に引用したような意味をもつことであつてみればある程度想像されることであるが、この作品の読後の第一の印象が『タイピー』のそれと較べるといかにもまとまりのないことである。悪く言えば、散漫な印象しか受けないのである。『タイピー』では、語り手||主人公が捕鯨船ドリイ号から〈逃亡〉し、その後タイピー部落で〈軟禁〉され、そしてそこから〈脱出〉するという明確なパターンをもつたストーリーが全篇を通じて存在し、そのうえ、タイピー族は食人種か否かという語り手||主人公にとって（ということとは読者にとつても）スリルとサスペンスをもそなえていたのである。

『オム』でも、なるほど主人公のジュリア号における〈反乱〉、そしてその反乱分子であつたということとタヒチ島内のカラブーザ・ベレタニ（英国監獄という意味）でのまことにのんびりした〈軟禁〉を受けるといふ体験が綴られる。が、しかし、それはこの作品全八十三章の三十章余りにおいてのみである。作品全体から見れば右のストーリーはあくまで部分的な挿話にすぎないのである。この意味からも、例えば、『オム』中のタヒチ島はとつても『タイピー』中のタイピー溪谷にとつて代わるものなどではなさそうなのである。

(2)

さらに、そのような相違点に加えて、『オム』第一章で、語り手||主人公がタイピー溪谷から命からがら脱出して来た矢先、早くも次のような感懐を抱くことに注目したい。

もう一度家にも帰ることができ友達にも会えるという期待で無事船上の人となると、——これは長い間わたしが熱心に祈り続けてきたことであつたのに、——それにもかかわらず、振り落とすことのできぬ憂鬱な気分が重くのしかかるのをわたしは感じた。それは、あの人達、つまり、わたしを捕虜にしておこうとしながらも、全体としては、非常に親切に扱って

れたあの人達に二度と会えないという思いであった。わたしは彼らと永遠の訣別をしたのであった。

わたしの脱出はあまりにも思いがけず突然であったし、その間中あまりにも興奮していたし、溪谷での蓄沢でゆったりとした気分と海に出てからの船上での荒々しい騒動との対照があまりにも大きかったので、しばしば先ほどまでのわたしの冒険が全く一つの夢のように不思議に思われたのであった。そして、今海岸の向こうに沈もうとしているあの太陽は、あの朝タイピーでわたしが筵に横たわっている時、山の上に昇り、わたしを覗きこんだのだということがほとんど信じられないくらいだった。

この感懐がたとい感傷的であっても間違ひなくわれわれに伝える事柄は、語り手||主人公にとって、恐ろしい食人種であったはずのタイピー族の捕虜という境遇から念願の脱出を果たしたとたん、そのタイピー溪谷が非常に懐かしいものとして回想されていることであろう。ところが、この回想はさらに高じてタイピー溪谷こそはへ原始無垢の樂園なりという一種の美化作用を果すのである。

次の文章は前作『タイピー』中のもものではあるけれども、これも語り手||主人公がタイピー溪谷を脱出した後になって始めてなされたもの、つまりは回想という作用を通じてのタイピー観であると考えてよい。(なぜなら、虜囚中の主人公にとっては、タイピー族が食人種であるかも知れないという恐怖の方が常に先んじていたはずであるから。)

……わたしの判断しうる限りでは、谷全体に満ちわたっていた不断の幸福は、ルソーもかつて体験したといっているあの森羅万象に充満する感覚、健康な肉体的存在のうきうきとした感覚から主として生じたものであった。そして、じつにこの一点においてこそタイピー族は自らを寿ぐに充分な理由をもっていた。なにしろ彼らは病氣というものをほとんど知らないのだから。……

〔タイピー〕第十七章)

これに較べて、タヒチ島カラブーザで捕われの身になった主人公達のもとにまるで動物園のライオンでも見物

するように押し寄せた村民達について、主人公は語り手が行なう観察は次のようになるのである。

これはわれわれには観察のいい機会を与えられたことになる。わたしはかなりの人数が病身あるいは奇形であるのに気づいて胸が痛んだ。これは間違いなくある悪性の病気のせいであり、原住民は治療を受けても最後には筋肉や骨をほとんどきまって冒されているのであった。……

これやその他の病気が白人による島の発見以前には存在しなかったのであるが、ある風土病——ファーフア、つまり象皮病の事例が幾つか見られた。この病気はもっとも古くから彼らの間に流行していたように思われるのである。

(三十三章)

ここでは、原住民の健康（あるいは病気の）状態という一点だけをとって比較してみても、語り手は主人公にとってタヒチはとてもタイピーに代わるものでないことが判明するのである。

(3)

この発見は彼にとつてかなりショックであったに違いない。それというのも自分達の乗っていたジュリア号がタヒチに寄港することを知らされた時、彼がタヒチに期待したものは決して小さくなかったからである。

第十八章には、ジュリア号がタヒチ島に接近する時の島のたまたまが描かれるが、これはタヒチがタイピーに、つまりは楽園に代わるものではないかという語り手は主人公の期待と憧憬が強く働いている描写と考えられるものである。したがって島の外からの眺めの美しさは見事なものである。

海から見ると、その眺めはすばらしい。海岸から山の頂までが濃淡をつけた緑の塊であった。それが谷、尾根、峡谷、小滝によって際限のない変化を見せているのである。……

回想の楽園を求めて

接近しても、その絵のような美しさは魅力を失うことがない。感受性を少しでもそなえたヨーロッパ人にとって、このような谷を——原住民が行き交う場所を離れて——散策する時、風景のえも言われぬ安らぎと美しさは格別で、何を見ても夢の中で見るもののように映り、しばらくの間はこのような景色の中に普通の人間が住んでいるなどほとんど信じたくなくなると言っても誇張ではない。フランス人がこの島にアフロディティの生誕地に因んでニュー・キティラと名付けたのも不思議ではない。「わたしはエデンの園を歩いているようにしばしば思った」とド・ブーガンビル（訳注、一七二九—一八一）は述べているのである。

繰り返して言えば、ここでは、タヒチの名を耳にし、その美しい光景を始めて眼のあたりにした時、ここにこそ郷愁をこめて回想されるヘタイピー（楽園）を再び発見することができるのではないかという大きな期待が語り手（主人公）にはあったというふうにならわれないには読み取ることができるのである。

しかし、これはあくまでも外からの眺めを見た時だけのことであった。彼が実際に、そこに上陸し数週間カラブーザでの虜囚中につぶさにタヒチを観察した結果はどうであったか。それが第四十五章から四十九章の「タヒチの現状」なるまことに皮肉な標題の章に至るまでの記述となるのである。

それによれば、まず、タイピー（溪谷）がいわゆる西洋文明人との接触を全くもたなかった（だからこそ、語り手（主人公）は『タイピー』の物語を、未知なるものを紹介する時によくあるように力をこめて綴ったのである）のに対し、タヒチ島ではその接触が早くから行なわれていたという大きな相違がある。語り手はそれを次のように言う。

ポリネシア人を文明化し、キリスト教徒にしようとする宣教師の企てを含め、ポリネシア人と外国人との交流によつて
たらされた結果の中で、タヒチ島は多くの点で明らかに最も公平で実例的な例である。
（四十章）

そのうち第四十九章は社会的な側面から見たタヒチ島民の、文明ないしは文明人との接触の状況と、それに對する語り手Ⅱ主人公の評価とが述べられる。それによれば、島民の最大の性癖である怠惰を矯正するために幾つかの文明的な試みがなされてきた。例えば、棉栽培、砂糖きび栽培の導入、織機の輸入等。しかし、タヒチ島の風土にすっかり馴化した彼らの性癖にはいずれの試みも受け容れられず、ことごとく失敗に帰してしまつたという。あげくに、語り手は決定的とも思われるデータを挙げて、文明がタヒチ島民に与えた影響についての結論をつけようとする。そのデータとは一七七七年にクック船長が推定したタヒチ島の人口は約二十万人であつたのに対し、四、五年前の人口調査ではわずか九千人に激減したというものである。そして、語り手はその原因を次のように語ってみせるのである。

〔人口激減の原因となつた〕その害悪はもちろんひとえに外来的な起源に発するものである。酒浸り、時おり起こる天然痘の侵入、その他のことは当然のことながら言うまでもなく、ある悪性の病気を挙げれば十分であろう。この病氣は現在島民の少なくとも三分の二の血液を汚し、さまざまな形で親から子へと伝えられているのである。 (四十九章)

その結果として、

彼らの前途は絶望的である。歴史が常に具現化してきたある一つの原理の顕著な例から彼らが免れることは、今や幾ら獻身的な努力をしてみても不可能である。野蛮と文明のそれぞれがもつ腐敗したすべてのものが結合し、それぞれの徳を排除してしまふという位置に彼らは数年前に達してしまつたのである。他の未開人と同じく、ヨーロッパ人と接触した彼らは完全に消滅してしまふまでここで停止していなければならないのである。 (同 章)

という予測をして、語り手は最後に「タヒチ島の老人が低い悲しげな調子で次のように詠唱するのをしばしば耳

にしたことがある」と、その歌を駄目を押すかのごとく書き添えるのである。

「ア ハルレ タ フォウ、

ア トロ タ ファルラロ、

ア モウ タ タラタ。」

やしの木は生長し、

珊瑚は広がる、

しかし、人は死に絶える。

(同 章)

ここに至っては、タヒチ島は〈へ原始無垢の楽園〉などでは決してなく、むしろそれは〈へ終末の世界〉を具現していることが明白となるのである。

(4)

再三、序文によれば、キリスト宣教教師の布教活動がタヒチ島民に与えた影響をつぶさに観察しその結果を報告することも、語り手にとってこの物語の重要な課題の一つであった。ただし、語り手はその課題を遂行するにあたり、「宣教師達にも彼らの大義名分にも悪意を抱くものではない、現状のままを報告したいとだけを願ったものである」と弁解がましくも断るのはその方面からの攻撃に備えて、十分予防線を張って置くことを忘れてはいないからである。したがって、六十年近くに及ぶタヒチ島における布教活動を評価する時も、「全体としては」島民の道徳は宣教師達の存在で向上したことをまず認め、さらにタヒチ島語訳の聖書が完成されたこと（これは文句なく最大の成果だと認めている）を挙げるが、このように肯定的な面を先に取りあげるのも評価にあたって

はできるだけ公平な態度であることを示そうとする語り手のいわば一つのポーズなのである。

したがって、逆に宣教師達の布教活動に対する批判を述べる時の方に、語り手の面目は躍如としているのは当然のことであろう。次に見られるような主人公語り手とタヒチの娘との会話やそれに対するコメントなどはその適例である。

「……ア、イディーア ミコナリ オエ？」これは長たらく言うところになる。「ところで、イディーアさん、あなたは教会員ですか？」

「イエス、ミ コナリ」という返事。

しかし、この断定はすぐにある保留によって修正されたのである。あまり奇妙なのでわたしはそれを述べるにはおれない。「ミコナリ エナ」(教会員であるのは、こだけ)と、彼女は口に手を添え、ここという副詞をひどく強調して叫んだのであった。同様に、似たような叫び声をあげて彼女はその両眼と両手に触れた。そうしてしまうと、彼女の態度は一変して、他の幾つかの点では自分は正確には「ミコナリ」でないことを彼女はまぎれもない身振りでもたしに理解させたのである。要するに、イディーアは

「心では真面目で善良なキリスト教徒であっても――

肉体的な面ではとてつもない異教徒」*

* ポープ「貴婦人への手紙」(原注)

だったのである。

(四十六章)

この例が生き生きと示していることはキリスト教の布教は偽善者を生んだということである。でなければ、タヒチ島の娘達は宣教師のうるさい眼を盗んで案外自由でのびのびした生き方をしていたとも思われる。しかし、それとてやはり偽善であることには間違いない。他にも島の名士達によって構成される「カンナキパー」(これ

は巡査がなまったものことである」と称する宗教警察も島民の偽善を生むのに寄与していたというが、そのカンナキパーは鞭をもって島内を巡回し悪徳を偵察するので島民達の恐怖の的だったのである。

それに宣教師達自身の生活ぶりも主人公 \parallel 語り手にとって十分批判に値するものであった。タヒチ島に隣接するイミオ島では宣教師の子供達の教育は島民の子供達の悪徳の汚染を受けないようにと隔離して行なわれ、また、サンドウィッチ島でも、宣教師の子供達の遊び場には高く柵が設けられていたというのである。

さらにそのうえ、キリスト教宣教師が「多くの無邪気に見えるスポーツや娯楽」を異教的なものとして禁止してしまったことも語り手は槍玉にあげる。レスリング、徒歩競走、槍投げ、ダンス、フットボール投げ、凧揚げ、笛、民謡などの民族的なものが禁止されたという。その結果として、語り手は次のように結論する。

確かに、このようにしてタヒチ島民からいわばその民族性を奪ってしまうにあたって、宣教師達は心底良かれと行って行ったことであろう。しかし、その結果は嘆かわしいものであった。これら禁止されたものに代わる娯楽は何ら与えられなかったから、他の民族よりもレクリエーションを必要とするタヒチ島民は、タニー寺院でかつて行なわれた遊戯よりも数倍も有害で無気力な状態に沈んだり、肉欲に耽ったりしてしまったのである。

(四十七章)

こういった批判は、しかし、直接語り手自身の口からではなく他人の言葉で行なわれることが多い。語り手のそのような方法は先に挙げた老人が唱える歌やポープからの引用を行なうなどの場合と軌を一にしているように思われる。その点では、ここでも、批判にあたり常に客観的であろうとする、あるいはそう見せようとする語り手の態度は老練・狡猾、そして慎重そのものと言えよう。「このような主題に関して一個人が判断を下すのはあまりにも僭越であろう。そこで、他の所で見られるわたしの行きあたりばったりの意見に代わって、さまざまな状況下の、異なった時期における、そして、比較的最近に至るまでの何人かの著名な人との意見を提示しよう」

と前置きをしたうえで、彼はあるロシア人の航海長の次のような意見を書きとめる。もとよりこの意見は「何人かの著名な人々の意見」の一つにすぎないが、語り手^{||}主人公の、宣教師ないしはその布教方法に対する批判、攻撃はこれをもって止めを刺すのである。

「あらゆる無邪気な喜びを禁止し、あらゆる知力を抑えつけ滅ぼしてしまふような宗教はキリスト教の聖なる始祖に対する侮辱である。なるほど宣教師達の伝えた宗教は、多くの悪と共に、ある程度の善をなした。窃盗や淫乱の悪癖を抑制した。しかしそれは無知と偽善を生み、タヒチ島民の開放的で優しい性格に、かつては無縁であった憎悪、つまり他のすべての信仰形態に対する憎悪を生み出してしまったのである。」

* コツェブ航海長『世界航海記』より（原注） （四十八章）

(5)

このようにして、タヒチ島に〈回想の中の樂園〉を見出しえないことが判明した以上、もはや主人公^{||}語り手にとって長居は無用であったはずである。もっとも、だからと言って彼は深刻ぶるようなことは決してなく、まるでそれを意識しないかのごとく快活な装いのもとに島を去る決心をする。「わたし自身について言えば、わたしはぼつぼつ変化を求め始めていた。大きな船で出発することはできそうになかったので他の方法を考え出さなければならぬと心を決めていた」（五十一章）。それならば、彼はすぐ帰途についたかと言えれば決してそうではなく、そういう快活な姿勢にはうってつけの「海岸流浪人」^{ベリタコウ}（すなわち「ホーン岬を廻って帰郷するなど夢にも思わず、太平洋に執着している無頓着で陽気な〔放浪する〕連中」、二十一章の注にある定義より）としての生活を始めることになる。

回想の樂園を求めて

その仲間は、これまたそんな生活にうってつけの暢気極まりないドクター・ロング・ゴースト。さし当り目指す所はタヒチ島に隣接するイミオ島であった。

(6)

イミオ島マーテア部落での二人の滞在は、冒頭にも触れた二人の白人（ジークとシューティ）が経営する農園での労働に費されるが、ビーチ・コウマーたらんとする二人の働きぶりは決してほめられたものではない。ふざけ半分、面白おかしくの自墮落な生活を送る二人には、そこがタイビー溪谷に代わるものなどという意識など毛頭存在しよがなかつた。

そういうことが、彼にそこを離れさせ、島の奥深く木立に包まれた湖岸のタマイという孤村に向かわせたのかも知れない。というのも、タマイとは、「湖には美味な魚が豊富であり、湖岸に見事な果物が熟れている」という地であったからだ。「そのうえ、タマイにはソシエテ全群島の中でも最も美しく最も世間ずれしない女性達が住んでいた。要するに、村は海岸から非常に離れており、他と較べて最近の変化を受けることが極めて少なかつたので、大抵のことで、キャプテン・クックの時代、つまり、幼君オトウの時代に存在していたのと同じくらいに古いタヒチ人の生活がここでは見られる」（六十一章）というものだった。

そして、無視できぬもう一面として、「タマイの住民は名目上はキリスト教徒であったが、教会の管轄から非常に離れていたから彼らの宗教が彼らに負担となることはあまりなかった。異教徒的な多くの遊戯や舞踊が彼らの村では相変わらずこっそりと生き続けていると、わたし達は聞かされました」ということがあった。

ということは、このタマイ部落とはおよそ現存のタヒチらしくない地、いわばそのアンチテーゼとしての地で

あることになるから、明らかに語り手||主人公にとって、それがヘタイピー||原始無垢の楽園の再現、あるいはそれに非常に近いものとして浮かび上ってきたことになる。

そこに到着した二人は期待に違わないことを知って、定住する意志を持つ。しかし、結局はそれも部落に近づきつつあった白人宣教師のために阻害されることとなる。もしその白人達に見つかれば、二人は逃亡水夫として逮捕され、まず海岸へそれからタヒチへと連行される危険があったからである。二人は大急ぎでマーテアの農園に逃げ帰ったのだから、主人公の「ヘタイピー||楽園」の夢はあえなく消え去ったことになる。

(7)

とりあえず、ユーテア部落に二人が戻ることにしたのは、次にはタルーを指すためでもあった。語り手||主人公によれば、「そこはタマイにいた時にはそう遠くない所であったのだが、できるだけ多くこの島を見たいと思ったので、いったんマーテアに戻りそれから海岸沿いに出かけることにしたのだ」という。ここでも、「できるだけ多くこの島を見たい」ということや、「海岸沿いに出かける」という意向には、やはり放浪者（ビーチ・コウマー）としての面目が発揮されていよう。

そのうえ、また主人公||語り手によれば、「われわれ放浪人にとつて『素晴らしい機会』を提供してくれるものとしてタルーを見なさざるをえなかった。捕鯨船で海に出かけたり、あるいは、砂糖きびの農園で日雇い労働をする便宜は言うまでもなく、女王陛下に仕えて高い信頼と報酬を受けられる役職につけるといふ見込みを期待することもできた」ということになる。ここに述べられることから、もはや回想の楽園を求めての放浪を続けるというのではなく、ビーチ・コウマーとしての境遇に身をどこまでも任せようとする態度をわれわれは読み取るこ

とができるのである。

これに関連して、タルーを目指していよいよマーテアの部落を出発する朝、主人公Ⅱ語り手が次のように述べることにも注目したい。

わたし達が朝早く漁師の起き出す前に起きてマーテア谷を出発したのは「タマイからの逃走」を意味する言葉、「ヘギラ」と名付けられた月の第一番目の月の四日目にあたった。(わたし達はこれからはこの日付で数えることにした。)(六十七章)

ここでは、わざわざ原住民の言葉である「逃走」という言葉を暦として使用することを語り手は宣言しているのである。これはどういうことなのか。タマイ部落に至るまでの主人公Ⅱ語り手の姿勢が、すでに述べた通り、たとい無意識のうちでも回想の楽園を求めてという追求のそれであったとするならば、これはまさしくその正反對の姿勢を意味していると考えられないだろうか。もちろん、この「逃走」は直接には、彼らを逮捕しようとする白人(官憲)からの逃走のことであって、主人公が追求の対象(楽園)から逃走することを言ったのではない。しかし、それが同時に地理的には、(さらにあえて言えば心理的にも)タマイ部落(楽園)からの逃走を意味していたことは確かなのである。もっとも、この逃走は『タイピー』で見られたような何とかして危険を脱出したという切羽詰まった積極的な逃走ではない。むしろ(回想の楽園)を追求することをあきらめてしまった、つまり、追求という目的から逃げ出してしまった時に見られる消極的な姿勢——これがヘギラという言葉の意味にも含まれていると考えたい。

そのタルー行、つまり逃避行の途中、二人はキリスト教の布教基地であるパトローウィ部落に立ち寄ってポポという敬虔なクリスチャンの歓待を受けたり、砂糖きびの農園の見物をしたり、またヘギラから二月半を経た頃

かねてからの予定のポマレ女王陛下の目通りがかなった時にはこと思わくと違つて仕官の道などおおよそ不可能であることを知つたりもする。

そうしている間に、このような回想の楽園を求めることからへ逃れるへ生活、無為の生活、つまり、ビーチ・コウマーとしての主人公の生活自体がぼつぼつ破綻をきたし始めることになる。

官仕えの期待がはずれたため、わたし達は海に出かけることに決心した。ポポの歓待にこれ以上甘えていることは決してためにならなかつた。イミオ島での生活にもいささかうんざりしていたので、陸にあがつた水夫が皆そうであるように、とうとうわたしは海原が恋しくなつたのである。

(八十二章)

(8)

「陸にあがつた水夫」である主人公にとって、もはや陸には用がなくなつてしまつていたので。へ回想の楽園を求めようとする有目的な放浪とその挫折後の無為で無目的な放浪(ビーチ・コウマー)という二つの意味をもつていた、南太平洋の島々の「放浪」者は再び水夫に戻ることになるのである。

折しもタルー港には米国マーサズ・ヴィンヤードの捕鯨船リヴァイアサン号が碇泊していて水夫の補充を図つていた。文字通りに渡りに船であつた。もっとも、困つたことには、今まで放浪の仲間であつたドクター・ロング・ゴーストの方は人物に問題ありという船長の偏見ゆえに乗組みを拒否されてしまつた。しかし、主人公の心配をよそに、彼は、よく考えてみれば自分はもともと水夫でない、まがりなりにも医者であること、陸人が捕鯨船に乗組むことはめづらしくないとは言え自分としてはそのような卑しい地位につく気のないこと、要するに、しばらくイミオ島に留まる決心をしていることを快活に告げる。

こう告げられて、主人公の方の決心もいよいよ固まった。

わたしはこの事をよく考えてみた。そして、とうとう島を去る決心をした。わたしにもう一度海に出よと駆り立てる衝動と最後には故郷に帰ることのできる見通しとは抵抗できないほどの大きなものがあつた。特にリヴァイアサン号は非常に快適な船で現在は最後の捕鯨中だから一年余りのうちにホーン岬を廻って故郷に向かうことは間違ひなかつたからである。

(八十一章)

もともと陸人^{ランドマン}であつたものと船乗り^{セーラー}であつたものとの海に対する憧れとそしてその裏返しとして故郷を慕う氣持の強さの違いをここで読みとることもできよう。いずれにせよ、主人公語り手は南太平洋を放浪することを止めて、ホーン岬を廻る決意をしたのである。このことは同時に彼のビーチ・コウマーとしての生活にピリオドが打たれることでもあつた。

さらにこのことはまた、『タイピー』、『オム』がこれまで詳述したようにそれぞれ異なつた特色、——すなわち、『タイピー』が〈原始無垢の楽園〉の発見であるのに対し、『オム』がその〈回想の楽園〉を求めての放浪という特色を持つ作品であるものの、ともに主人公語り手の南太平洋における体験という事実をふまえた文学であつたものにひとまずピリオドが打たれることでもあつた。タヒチ島に楽園を再発見できなかった語り手主人公は今度は虚構^{フィクション}の中にそれを見出す仕事に精を出すことになるのである。

メルヴィルの作品中からの引用はすべてノースウェスタン・ニューベリ・ライブラリー版による。

注

① 例えば、『タイピー』と『オム』は、それらが一つの連続した物語を語っているのとまさしく同じく、一つの連続した

作品として読まれるべきである。……換言すれば、『タイピー』と『オム』は一つの連続したヒカレスク物語を形成して
いく、それはただ便宜上二冊にわけてくるにすぎない。」 James E. Miller, Jr., *A Reader's Guide to Herman Melville*
(New York, 1962), p. 21.